

# ラクロスのポジションと性格の関係 The relationship between personality and position in lacrosse

1K08A248-3

渡辺 雄介

指導教員 主査 正木宏明 先生

副査 堀野博幸 先生

## 【目的】

筆者はラクロス競技に関わっている中でポジションによって性格に違いがあると感じるようになった。なぜならポジションによって1つのプレーやミスに対する考え方や感じ方が違うからである。また、不安の感じ方にも違いがあるように感じた。

そこで本研究によってラクロスではポジションによって性格に違いあることを明確にし、性格によって適切なポジションがある可能性を導くことによって今後のラクロス指導の一助になればと考えた。

また、これまでの先行研究では具体的なポジション別の性格の違いを示すことはできなかった。そこで本調査では世界基準とされている Big Five の人格因子と、競技不安という尺度からの新しいアプローチによって、ポジションによって性格的特徴に差があることを示すことを目的とした。

## 【方法】

実施期間・・・2011 年 10 月下旬～11 月下旬の約一ヶ月間で実施した。

手続き・・・上記約一ヶ月の間に選手に質問紙を配布し、個々人に記入してもらった後、回収し集計した。

調査対象・・・本校の男子ラクロス部員 83 名(18～23 歳)のうち有効回答と認められた 81 名であった。

質問紙

NEO-Five-Factor-Inventory(NEO-FFI 人格検査)

選手に回答してもらった後、5 因子(N,E,O,A,C)について数値を集計した。回答方法は、5 件法で自分の性格にあてはまるものを回答した。判定は素点を用いて行なった。

Sports-Anxiety-Scale2(SAS2)

スポーツ競技における不安を調べる質問紙で、15 項目の質問で構成されている。回答方法は 4 件法で自分の試合中・試合前にどれほどそう感じるか自分にとって“いつも”をあてはまるものを回答した。1～4 の回答をそのまま数値として集計し合計値とした。さらに質問項目を5つずつ3つのグループ「somatic(身体的)」、「worry(不安)」、「concentration-distracton(集中力散漫)」に分け、それぞれの数値を集計した。

分析方法・・・選手から各質問紙を回収後、数値を集計した後、統計処理として一元配置分散分析を行ない、各項目ごとにポジション間で有意差があるか検討した。

## 【結果】

NEO-FFI 人格検査について、外向性(E)の値においてミッドフィルダー(MF)がアタック(AT)、ディフェンダー(DF)に対して高く、有意傾向( $p<.10$ )を示した。またゴーリー(G)がアタックに対して高く、有意傾向( $p<.10$ )を示した。

SAS2 について各ポジション間では得点に差が見られなかったが、OF と DF に分けて検討した場合、集中力散漫(con-dis)において OF が DF に対して高く、有意傾向( $p>.05$ )を示した。

## 【考察】

NEO-FFI の各ポジション間について

各項目について数値に差が出たものの、統計学的には外向性の値でのみ有意傾向に留まる結果となった。

外向性(E)の値について、ミッドフィルダーは最も多くの選手とコミュニケーションを取るポジションである。それが下位因子である群居性に関わったと推測できる。また、MF を選択した選手は攻撃と守備の両方をやりたいという理由で希望した選手が多く、下位因子である刺激希求性に反映されたと推測できる。

さらに G が AT に対して有意傾向で高い値を示したことは、恐らく得点(失点)の可能性が高い場面において AT はそれを不安に感じる傾向にあり、G はチャンスを止めるというワクワク感に繋がったと考えられる。つまり、AT にとっては N の不安に、G にとっては E の刺激希求性に反映されたと考えられる。

SAS2 の各ポジション間について

4 つのポジション間で比較した場合にはいずれの項目においても差は見られなかった。競技不安という尺度は個人的なものであり、選手それぞれの不安に対する感じ方を示すものである。本研究の結果はラクロスに対して感じる不安と、過去のスポーツ経験からも反映された得点であると推測され、ポジション間で一定の傾向は見られなかった。

しかし、オフENS(OF)とディフェン(DF)に分けて比較した場合集中力散漫の得点において OF が高い値を示した。これはラクロスにおけるオフサイドルールによって、オフENSの選手とディフェン(DF)の選手が明確であることが反映されたものと推測される。この結果は OF と DF 間という大きな枠組みであれば、競技不安という観点からポジションの差を見ることに意義があることを示唆している。